The University of Osaka
Institutional Knowledge Archive

Title	意匠学会第44回大会報告
Author(s)	太田, 喬夫
Citation	デザイン理論. 2003, 42, p. 91-98
Version Type	VoR
URL	https://doi.org/10.18910/53179
rights	
Note	

The University of Osaka Institutional Knowledge Archive : OUKA

https://ir.library.osaka-u.ac.jp/

The University of Osaka

意匠学会第44回大会報告

第44回大会は，京都工芸繊維大学が当番校となり以下の日程で開催されました。

期　日　平成14年11月８日（金）－10日（日）

当番校　京都工芸繊維大学

プレイベント　研究報告セッション

会　場：工繊会館

第１部（13時30分－15時30分）　司会：櫛　勝彦（京都工芸繊維大学）

広告キャラクターの形態と変容　木村　亮（京都工芸繊維大学Ｍ１）

アートと社会の関係について ── 川俣　正の制作を例に

山田　綾（京都市立芸術大学Ｍ２）

ＷＥＢデザインにおける「動き」と感性の関係に関する研究

── 一般作成者のための理論的枠組の構築にむけて ──

山井理恵（京都工芸繊維大学Ｍ２）

第２部（15時45分－17時５分）　司会：中野仁人（京都工芸繊維大学）

「辻が花」における描絵表現について　山門貴子（関西学院大学Ｍ１）

月岡雪齋と工房　西垣　香（関西大学Ｍ２）

第３部（17時20分－19時20分）　司会：三木順子（京都工芸繊維大学）

機能とフォルム ── “Der moderne Zweckbau” における対立の論理 ──

山本一貴（神戸大学Ｄ１）

ブルーノ・タウトの建築と色彩 ── ベルリン近郊の自邸を中心に ──

松友知香子（大阪大学Ｍ２）

海外の出版物に描かれた日本の建築文化

── 19世紀後半から20世紀初頭にかけてのヨーロッパを中心に ──

金刺礼子（神戸大学Ｄ１）

19時30分－20時30分　交流パーティ（於：工繊会館）

11月9日（土）

会　場：1号館53教室

10時　受付開始

10時20分　開会

10時30分－11時50分　　司会：佐藤敬二（京都工業試験場）

研究発表1　近代日本における椅子開発とその社会的背景

── 寿商店「ＦＫ式」回転昇降椅子を事例として ──

岡田栄造（京都工芸繊維大学）

研究発表2　神坂雪佳と競美会

近代京都の陶芸史からの一考察　　清水愛子（京都工芸繊維大学）

13時－14時　総会

14時－15時20分　　司会：渡邊　眞（京都市立芸術大学）

研究発表3　『みだれ髪』と『或る女』から読む「衣」　　羽生　清（京都造形芸術大学）

研究発表4　デザイン史の現状と課題　　藪　亨（大阪芸術大学）

15時35分－16時15分　　司会：並木誠士（京都工芸繊維大学）

研究発表5　国家事業としての博物館の成立

── 明治初期の内務省博物館と教育博物館の設立を通して ──

黄　貞燕（京都工芸繊維大学）

研究発表6　近代的化粧の形成 ── 美容家の提唱から ──　　玉置育子（武庫川女子大学）

17時－19時　懇親会　会場：アルス

11月10日（日）

会場：1号館53教室

10時－12時30分　　司会：足立裕司（神戸大学）

研究発表7　イギリスの文化政策と都市再生プロジェクト

吉村典子（宮城学院女子大学）

研究発表8　大阪市立中央公会堂の建築様式と意匠について

山形政昭（大阪芸術大学）

研究発表9　Hugo Häring の建築論 ── 生物学との比較を中心として ──

中江　研（神戸大学）

13時50分－15時　パネル発表懇談会（於：1号館52教室）

パネル発表　schöne Seele　　上田博之（京都教育大学）

山の空間2002　北辻　稔（財。大阪都市協会）

小石原焼伝統産業会館 ── 建築と工芸の意匠的融合 ──

徳岡昌克（徳岡昌克建築設計事務所）

Mode de Papier ── pliage ──　原田純子（神戸文化短期大学）

ことばグラフィ　水野哲雄（京都造形芸術大学）

「映像メディア研究」における実験的映像制作　豊原正智（大阪芸術大学）

課題「死者の家」

成安造形大学住環境デザインクラス卒業生　畠山鉱平・高橋祥剛

紹介：島先京一（成安造形大学）

15時－18時30分　シンポジウム　司会：太田喬夫（京都工芸繊維大学）

テーマ：デザインの現在 ── 三つの提言

建築・ヴェネツィア・ビエンナーレを巡って

ゲスト・パネリスト：岸　和郎（京都工芸繊維大学）

日本デザイン機構のデザイン活動

ゲスト・パネリスト：山本建太郎（京都工芸繊維大学）

国際デザイン史学会議とデザイン史研究の現在

パネリスト：藤田治彦（大阪大学）

今大会は，意匠学会および当番校の共催でプレイベントとして「研究報告セッション」を新たに設けました。関西のデザイン系の各大学の若手の研究者（大学院生）に発表の場を提供し学会への積極的な参加と研究者同士の交流を目的に企画しました。大学院生８名の研究発表は，期待以上に充実しており，この企画は非常に好評でした。

大会第１日目午前から第２日目午前にかけて計９つの研究発表が行われました（本号掲載の発表要旨を参照）。今回は発表30分＋質疑応答10分の計40分の持ち時間で，９名の発表がありました。デザインの世界にふさわしく多種多様な研究テーマについての充実した発表と活発な質疑応答が行われました。特に建築関係の発表が多かった印象を持った。

総会では，宮島久雄会長の挨拶の後，第１回意匠学会賞の受賞者が発表され，また，学会のホームページ（ＷＥＢ）の開設が報告され，さらに，今年度からの学会誌『デザイン理論』の年２回発行が承認された。これらの新たな試みが意匠学会の活性化につながってくれることを願いたい。

懇親会は第１日目の夕方，大学内の食堂で行われました。例年になく若い会員が多く活況を

呈した印象を持った。宮島会長から，意匠学会の活性化に向けた一層の協力の必要が述べられた。科学研究費の申請に関して，できるだけ申請を行う勧めの話があった。

第２日目午後には，まずパネル発表懇談会が開かれた。７件の作品を出品していただいた。展示空間の好み等の理由もあろうが，学会での作品展示はもっと充実すべきだと思う。今後の課題の一つであろう。理論研究の発展と共に，作品制作での新たな成果の展示も，学会の重要な仕事だと思われる。

最後にシンポジウムについて報告したい。

シンポジウムは大会日程の最後に設けたためか，参加者が50名程度と少なかったことが残念である。それといつもながら，時間が足りずにまとめるまでに至らなかった。いずれも主催者側の責任であると反省している。シンポジウムでは，「デザインの現在 ── 三つの提言」というテーマで，３人のパネリストの方々に，これからのデザイン研究に有意義となるような話題をそれぞれの専門の立場から報告していただいた。

その一つは建築の領域からである。ゲスト・パネリストの岸氏は，建築設計者としてヴェネツィア・建築ビエンナーレに関与されてきた立場から，昨年のビエンナーレと自らの建築展示を巡って報告していただいた。第二には，プロダクト・デザインの領域からである。ゲスト・パネリストの山本氏は，株式会社ＧＫに長年勤められ，日本デザイン機構のデザイン活動にも関与されてきた立場から，日本デザイン機構のデザイン活動の歩みと現在の課題について報告していただいた。第三には，数年来国際デザイン史の研究プロジェクトを進められている藤田氏から，国際デザイン史会議の報告とデザイン史研究の現在について報告していただいた。

「ヴェネツィア・ビエンナーレ第８回建築展」の全体のテーマは，「ネクスト」で建築の将来を開かれた仕方で模索しようという趣旨をもっていた。しかし，アメリカ館のファサードには，ＷＴＣの残骸の断片が置かれ，アルセナーレの会場では，時代錯誤を思わせる巨大な高層建築の模型が乱立し，建築の現在の一面は，現在の世界の政治を反映していた。これに対し磯崎新がコミッショナーを，岡崎乾二郎がディレクターを務めた日本館は，①日本館をアジア館に開放する。②前回（現代美術まがいの展示であった）とは異なり，非常にオーソドックスに建築の根本を問う建築展を行う。③大がかりな建築ではなく，住宅をテーマにする。④文字としての建築を考えてみる，という４つの基本方針を掲げ，「漢字文化圏における建築言語の生成」というテーマで展示を行った。具体的には，漢字が伝播していくことで形成されたアジアの漢字文化圏，そのなかで北京，ソウル，ハノイ，そして京都という４つの都市をケース・スタディとして住宅の在り方の現在を探ろうとした。この一部を岸氏が担当した。

岸氏は，漢字そのものの形態と類比的に建築を考えるより，そのシンタックス（偏と旁の組合せなど）を類比的に都市の住宅に当てはめ，中庭に焦点を当て，ひとつの問題提起を行った。

岸氏によれば，中国の「四合院」の中庭が積極的な活動のためのプラグマティッシュな空間であるとするなら，韓国の「マダン」は，活動空間ではあるが，そこに儀式的要素も加わり，形而上学的様相を帯びる。これに対し日本の町屋の「通り庭」では内外のインターフェイスの空間であることが強調され，「坪庭」は，ほとんど庭＝自然＝世界という表明であり，内部化された自然といってもいい。それはメタフォリカルな庭と呼べるのではないか。ここでは，外部，自然を導入する作法，すなわちシンタックスが問題となる。岸氏は，自らが手がけた三つの住宅を例に以上のことを指摘した。

岸氏によれば，日本館の示そうとした建築観は，ある意味でもう一度建築とは何か，その根本にかえる試みであったこと，その際，東アジアの漢字がひとつのメタファーの働きをしたこと，そして中庭に見られる内外空間のインターフェイスを重んじる町屋は，現在の都市住宅を考える際にも重要であるという主張であった。（参考文献：『漢字と建築』監修：磯崎新＋岡崎乾二郎，INAX 出版，2003.）

文字言語と建築との関係に関して，文字のメタファーとして建築を捉えるだけならいいが，より正確に両者の関係を考えると難しい問題が多く出てくることについては，岸氏自身そのことを認めた。また，自らは，新たな建築の理念というようなものには余り関心がないという考えであった。

パネリスト山本氏は，株式会社ＧＫのプロダクト・デザイン部長を歴任するなど，インダストリアル・デザイナーの栄久庵憲司氏の下で日本デザイン機構の活動にも関与されてきた。したがって，山本氏からは，日本デザイン機構の活動の歴史を紹介し，これからのデザイン活動のひとつの方向を提言していただいた。

日本デザイン機構は，1995年に東京に設立された。会長は栄久庵憲司である。活動目的は，①デザイン諸分野と他の専門領域を横断し今日的課題に対する提言・実践を行い，生活文化の形成に貢献することであった。②産業，行政，市民団体等と積極的に連携し，地球環境問題，歴史文化課題，災害，途上国問題など国際的かつ学際的な共同を要する課題に取り組む。③デザイン文化の形成に向けて，デザイン振興とデザイン教育の発展に尽力する。組織は，デザインを分母に技術，社会・人文・自然諸科学の学際的連携を図る組織である。活動形態は，フォーラム（オープン・シンポジウム），キャラバン，ワークショップ，研究総会などである。

デザインの国際貢献として難民のための居住環境，紙管を使った難民テント，可動式エネルギー供給施設と仮設病院，段ボール製の携帯簡易トイレなどのプロジェクトがあったことが報告された。

「ソーシャル・デザイン」のプロジェクトが注目される。その下に，子供の創造環境をチルドレン・ミュージアムという形で考えることや，難民・避難民のためのデザインや，エコロジー

デザイン，新デザイン教育につなげる新デザイン運動や，アジアのデザイン・コラボレーション，車社会のデザイン，水環境デザインなどの各論テーマがフォーラムで取り上げられた。

普通，ヴィジュアル・デザイン，プロダクト・デザインなどに細分化されがちなデザインの世界において，さまざまな活動分野の人々との共同作業として，デザインがアクチュアルな社会の問題と積極的に関与していくひとつの企てとして日本デザイン機構の活動は，注目される。1998年には本部をバルセロナに置く世界デザイン機構（Design for the World）が設立される。日本デザイン機構は世界デザイン機構と連携をして広がりを見せつつある。

山本氏の報告から，各都市に根ざした，同時にアジアや世界に開かれたデザイン運動の実践のプロジェクトチームの結成，組織作りが重要な課題であることが理解できた。また，従来の会社の縦割りの利益団体の組織から距離をおいた新たなチーム，組織の結成（たとえばＮＧＯ組織）とプロジェクトの遂行が重要であることが認識できた。（参考文献：『Voice of Design』日本デザイン機構事務局，栄久庵憲司「私の履歴書」日本経済新聞，2002.8.1-30.）

藤田氏には，氏が昨年トルコのイスタンブールで開かれた第３回国際デザイン史会議に参加した経験を踏まえ，国際デザイン史会議とデザイン史研究の現在について報告をいただいた。当報告は，今年３月大阪で藤田氏が中心になり開かれた第３回国際デザイン史フォーラムとともに，国際的視点から日本のデザイン史研究を進めていこうとする基本的コンセプトに基づいている。藤田氏には，①会議の歴史，②会議の全体テーマと分科会の内容，③会議の特色・問題点，④デザイン史研究の課題を提言していただく。第１回国際デザイン史会議は，1999年にバルセロナで開かれ，今回は第３回目である。全体テーマは，「地図に気を付けよ ── 境界を超えるデザイン史」であった。分科会は「デザインへの哲学的アプローチ」といった理論的研究から，「文化的グローバリゼーションにおけるクラフトとデザイン」といった，まさに国際会議にふさわしい今日的なテーマまで多岐にわたった。会議の特色・問題点として藤田氏は，①ミクロな研究とマクロな研究が混在，概して西洋諸国からの発表者には，マクロな発表が多く，そこに価値を見る傾向があること，②地方デザイン史と世界デザイン史との関係が，第１回会議から継続テーマとなっていること，などを指摘された。

デザイン史研究の課題を藤田氏は，世界に共通する課題と日本及び東アジア特有の課題に分け，前者の課題として，①グローバリゼーションの時代，発展途上国におけるデザインの近代をどう扱うか，②造形デザインではないデザインをどう扱うか，③デザイン史研究のレヴェル・アップの確立，などが問題となることを指摘された。

日本・東アジアの課題として，藤田氏は，周辺アジア諸国のデザイン史研究者との交流が重要であること，アジア諸国は，近代デザインの時代に植民地での状況にあったという歴史的背景をもっており，これを直視する必要が指摘された。

藤田氏の報告から，アジア諸国の近代化の多様性の認識が必要であり，地政学的，地図的視野がデザイン史研究には重要であることが再確認されたように思われる。アメリカ中心のデザイン史研究の批判の意味も込められていたように思った。

なお，第3回国際デザイン史フォーラムのテーマは「東西の画像と文字」。奇しくも文字言語，それも書き言葉とデザイン，建築との関係がビエンナーレでも，デザイン史フォーラムでもテーマとなったことが，デザインの現在のひとつの特色，傾向と言えよう。東アジアが，デザインを考える場合，重要となっているともいえよう。

藤田氏のコメントは，藪氏の研究発表の内容とも関連していた点，関心を引いた。デザイン史研究の目標として，歴史的文化のコンテクストを重視する立場と共に，デザイン作品の質の問題，価値評価の問題をいかに扱うかということも普遍的な課題であることが，会場の質問から示唆された。

（太田喬夫）